

論文東日本大震災被災地におけるスポーツ少年団の
レジリエンスの要因The Resilience Factor of Junior Sports Clubs
Damaged in the Great East Japan Earthquake

吉田 毅

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2017年9月28日 受理)

I. はじめに

わが国では東日本大震災(2011年3月11日発生、以下「3.11」)以降も災害が跡を絶たない状況にある。その度に被災地(者)の復興に寄与するべく、各方面で様々な支援活動が行われる中、スポーツ関係者も義援金募金や被災地訪問等の支援活動に携わってきた。メディア等で報じられる災害をめぐるスポーツの力とは基本的に、そうしたいわばスポーツ界の復興支援力を指すものであり、学界でも従来は『スポーツ産業学研究』¹⁾にもみられようにこの種の力が着目される向きがあった。2017年3月に施行された「第2期スポーツ基本計画」²⁾でも、スポーツが災害からの復興支援に有効であることが明示されているところである。

他方で、被災したスポーツ界が挫けることなくそれ自体の復興へ向けて進んでいく力も、正しく災害をめぐるスポーツの力に他ならない。この種の力はレジリエンス(resilience)と呼び得る。レジリエンスとは一般に回復力と訳され、かつては主に心理学領域で研究が進められてきたが、近年は他の領域でも議論

されるようになってきている³⁾。そうした中、わが国では3.11以降、レジリエンスを抵抗力をも含意する強靱性と捉え、その強化が様々な面で緊要な課題とされている。しかしながら、スポーツ研究領域でも従来、レジリエンスについては主に心理学的視座からスポーツ経験との関係性が検討されてきたのであり⁴⁻⁶⁾、災害をめぐるスポーツ界のレジリエンスに関する研究は、筆者が社会学的視座から3.11で被災した総合型地域スポーツクラブの回復力の様相を解明しようとした研究⁷⁾、またレジリエンスに言及してはいないが高校野球部と車椅子バスケットボールクラブの復興プロセスを探った研究⁸⁾の他にはみられない。

3.11被災地ではスポーツ界(スポーツ関係者やスポーツ施設等)も甚大な被害に遭った。今後の災害でもスポーツ界の被害は必至と危惧されるのであり、スポーツ界の持続ないし復興の要件とみられるレジリエンス、とりわけ災害からの回復力のあり方について講じていくことは重要といえよう。それにあたり、3.11被災地におけるスポーツ界が活動を再開し、復興へ向けて進んでいく力とはどのように発揮されたのか、換言すればスポーツ界のレジリエンス(回復力)の源泉ともいふべき

要因について検証を重ねていくことは有効であるに違いない。

なかでも子どものスポーツに着目すべきである。いかなる事態が生じても子どもの健やかな発育発達は不可欠であり、そのためにもスポーツは有効とみられるからである。有事の際にも、子どもにとっては一刻も早くスポーツができるようになることが望まれる。そこで本稿は、スポーツ社会学の立場から3.11被災地におけるスポーツ少年団（以下「スポ少」）のレジリエンスとして回復力の要因について解明することを目的とする。なお、本稿はスポーツの持続に関する研究の面でも独自性を有する。これについては従来、総合型地域スポーツクラブに関する経営学的研究⁹⁾¹⁰⁾がみられるに過ぎない。

II. 方法

本研究ではフィールドワークの方法を用いる。具体的には現地での聞き取り及び資料収集を行う。対象とするのは、3.11で最も人的被害が大きかった宮城県の沿岸部に位置するB町のC野球スポ少（以下「Cスポ少」）及びDサッカースポ少（以下「Dスポ少」）である。B町は3.11で海沿いの平地が10mを超える大津波に襲われ壊滅した。そのように甚大な被害に遭ったことから、筆者は上述した先行研究でもB町を対象とした。B町は「町内全域でライフラインは寸断された。死者・行方不明者は100名程、建物被害は全壊700件程を含め4000件程に達した」¹¹⁾。そうした中では両スポ少とも活動を休止せざるを得なかったが、およそ2ヵ月後には再開したのであり、ここで対象とするには妥当な子どもの地域スポーツクラブとみられる。

各スポ少の指導スタッフに研究の趣旨を説明し、調査協力を依頼したところ快諾が得られた。聞き取りの対象者は、各スポ少の指導スタッフとしてCスポ少の団長E氏（50代）、監督F氏（50代）、Dスポ少の総監督G氏

（50代）、ヘッドコーチH氏（30代）、甚大な被害に遭ったメンバーとしてCスポ少のI氏（4年）、J氏（3年）、Dスポ少のK氏（4年）、L氏（3年）であった（年代及び学年は3.11当時）。K氏とL氏は兄弟である。各指導スタッフに対し2014年5月から2015年3月の間に3回ずつ、各メンバーに対し2015年3月から2016年8月の間に2回ずつ聞き取りを行った。時間は1回につきおよそ60分から80分であった。E氏とG氏からは、聞き取りの際に各スポ少等に関する資料も収集した。

3.11当時、E氏は大型トラック運転手、F氏とG氏はB町役場職員、H氏は漁業協同組合職員であった。いずれも長年に亘って各スポ少の指導に携わってきた同町生え抜きの人物であり、G氏とH氏はDスポ少のOBでもある。3.11ではE氏とF氏は被害を免れたが、G氏とH氏ならびにメンバー4名は津波で自宅が全壊ないし大規模半壊し、さらにG氏は母を亡くした。各指導スタッフの聞き取りを終えた時点で、両スポ少とも復興を遂げたとはいえない状況にあったが、既に可能な限りレジリエンスを発揮したとみられたため、本稿ではその時点までを取り上げることにする。

III. 各スポ少の被災前から復興へ向けた様相

次に、各スポ少の被災までの様相、被災の様相、そして復興へ向けた様相について示す。それにあたり、主として各様相に詳しいとみられる対象者から得られたデータを基とする。被災までについては、Cスポ少ではE氏、Dスポ少ではG氏、復興へ向けては、Cスポ少では一貫してF氏、Dスポ少では活動再開までについてはG氏、再開後の活動についてはG氏とH氏となる。被災については適宜、各対象者から得られたデータを基とする。以下、対象者の語りをほとんどそのまま記す際は「 」を用いる。（ ）は筆者の補足、……は

中略を表す。

1. Cスポ少について

(1) 被災までの様相

Cスポ少は1975年、地元有志によりB町O小学校の3年以上の児童を対象に設立された。当初より児童の野球競技力向上と健全育成をモットーとし、礼儀も重んじてきた。活動場所はO小学校の校庭であり、基本的には火曜と木曜に練習、休日に試合ないし練習を行ってきた。他にも合宿やプロ野球観戦等を行うこともあった。「誰も指導者がいなければ休み……子どもだけの活動は一切させていない」とE氏がいうように、各活動には児童の安全管理等のため必ず指導スタッフ（成人）が付くことにしている。

指導スタッフは団長、監督、コーチ数名である。団長が渉外に当たり、諸活動の指揮を執るのは監督である。また、親の会も熱心に活動を支えている。E氏は自身の子どもがCスポ少に入っていたことを契機に1991年に副団長に、2000年に2代目の団長に就任した。F氏は高校時代までの野球経験と役場の野球チームでプレーしていたことを買われ、2001年にコーチに、2003年に5代目の監督に就任した。

設立当初よりCスポ少は県内の様々な大会に出場し、めきめきと頭角を現した。毎年春に開催される県内最大規模の大会では1981年に優勝した。さらに1998年には2度目の優勝を果たした。その後も暫くは好成績を残したが、近年は低迷し「出ると負け、出ると負け」（F氏）の状態であった。近年は少子化に伴い、メンバー数は減少の傾向にあったという。

(2) 被災の様相

3.11当時、メンバーは卒団した6年を除き20人程であった。I氏は既にレギュラーであり「野球は宝物」と思っていたのに対し、J氏は「まだプレーがうまくいかなかった……野球は好きだけどそんなに大事なもので

はなかった」という。メンバー及び指導スタッフ、また各々の家族に人的被害はなかったが、I氏とJ氏は自宅が津波被害に遭い、仮設住宅ができるまで2ヵ月あまり避難所（J氏の場合は数ヵ所）で暮らすこととなった。4月中旬まで、O小学校は避難所となり、校庭は駐車場に充てられた。Cスポ少は活動場所を失った。

もとより指導スタッフも野球どころではなかった。F氏は4月中旬まで、避難所運営等の業務のため土日も役場に寝泊まりするほど多忙を極めた。E氏は5月末まで、被災地で不足する物資の輸送のため「新潟、酒田、盛岡」等と被災地の間をトラックで往復し続けた。コーチ達も被災した自宅や職場の復旧作業等で慌しかった。F氏は「大人は仕事が大事。野球よりも復旧優先だった」という。

そんな中、I氏は避難所が「狭い」ため「あまり運動できなかった……ストレスがたまった」という。「もらったボールでサッカーやドッジボールをした」り「バットももらったので兄とトスバッティング」を行うこともあったが、それも「3日に1回くらい」のペースであった。両親からは「余裕がない……野球を止めるように」といわれ「悲しかった」が、野球は続けたいと訴えると両親が折れたという。J氏は避難所で友達とキャッチボールをすることもあったが、テレビをみている時間が長く「もっと動きたかった」。甚大な被害に遭ったことで「野球ができるようになるのか不安」に駆られる反面、「家への思いが強かった……野球するより家の手伝いが大事」とも思った。

4月中旬になると、B町ではライフラインの復旧が進み、学校再開のためO小学校避難所が閉鎖された。間もなく学校が再開されたが、同町の雰囲気はまだスポーツどころではなく、Cスポ少も活動を再開するには至らなかった。そんな中、交流のあった内陸部の野球スポ少から親を介して練習試合に誘われ、メンバー全員がコーチと親の引率の下に1度だけ出向いた。この件について、E氏は親か

ら事後報告を受けたが、F氏は知らなかったという。練習試合の際は、I氏は「野球ができて嬉しかった」が、J氏はまだ「家の方が心配だった」。

(3) 復興へ向けた様相

学校再開後、F氏は多忙な中でも時折「大人と違って子どもは遊ぶのが仕事……野球がしたいだろう」と思った。その度にCスポ少の活動を「やらなきゃならないだろうなとは考えた」という。メンバーの親からF氏へ、子どもが動きたがっているとの情報も次第に寄せられるようになった。「そろそろやってくれないか」(F氏)と活動再開を求める声もあった。F氏は「こっちの思いと親の思いが一致した」ことで活動再開を考えるようになった。そうした考えは、町長が子どもを優先し、早期に学校を再開したことからも後押しされたという。

ただし、F氏は「子ども達がやりたいっていう気持ちは分かる……遊ぶ場所も時間も、あるいは親も遊んでくれないので、子どもが遊びたいっていうのは分かる」が、活動再開を決めたのは「子どものためっていう思いだけではなかった。子どもを使って大人を元気にするっていうトータルな目的」があったからである。「被災して沈んでる町」に居た堪れず「(子どもが)運動してる姿を大人にみせたかった。子どもが頑張ってたんだっていう風景とか音を聞くことによって、少し大人も気持ちが明るくなったり前に向くんじゃないかなっていう思いがあった……子ども達を使って、大人が元気になることを願って」活動再開を決めたのである。

そもそもこうした思いは、F氏がCスポ少の監督を引き受け、また務めてきた理由でもある。かつて中総体でB中学校野球部が活躍すると新聞に掲載された。F氏は、それをみた大人が「Bは強いんだな」と嬉しがる姿を目にし、微笑ましく思った。「町民にそういうところで喜んでもらいたかった……スポ少で基礎づくりして……中学校で花を咲かせて

ほしい」との思いで監督を引き受けた。その後はCスポ少が活躍する様子も「新聞がまめに取り上げてくれた」ことで、「(B町の)爺ちゃん婆ちゃん」も遠くまで試合の応援に駆けつけてくれたという。高齢化するB町が活気づくのをF氏は実感したのである。

3.11以降、F氏は自身が生まれ育ったB町を「何とかしたかった」。そこでこの際も「子どもの元気」が同町の「大人へ刺激」を与えると考えCスポ少の活動再開を決断した。F氏は親の会とコーチ達にその旨を伝えると異論はなかった。E氏もF氏の思いに共感を覚えたという。E氏にもメンバーの親から活動再開の要請はあったが、5月末までE氏は多忙を極め余裕がなかった。活動再開の主導者はF氏であり、その後もF氏が指揮を執って活動を軌道に乗せていったとE氏はいう。

活動再開は5月の連休明けであった。F氏はその際、メンバーに対し「皆いろいろ大変だったのは分かる……でも皆の姿が大人を元気にする……皆の声が大人を元気にするから元気出してやってくれ」と伝えた。練習が始まると、3.11以前と変わらず皆が「動きは悪くなかった」。I氏は「野球ができて感謝した……野球ができて気持ちが楽になった」という。J氏は「メンバーと会えて嬉しかった」が「まだ家のことも気になった」。F氏は「被災した子どもが気が晴れてるような……野球やってる時は暗いことを忘れる、嫌なことは忘れるっていうような……声を出す、身体動かして汗を流すことによって晴れる。そういうことはあったと思う」という。J氏も「野球ができる」ことで次第に「イライラ、モヤモヤがなくなっていった」。

その後、夏休みが終わる頃まで活動は土日だけであった。平日は「指導スタッフの確保ができなかった」ためである。F氏もコーチ達も復旧に関わる業務で余裕がなかった。コーチ達は土日活動も休むことがあったが、F氏は4月中旬以降、土日は「役場でも休めよという指令」があり、活動が途絶えないように休まず指導を続けた。E氏は「練習には

出られる範囲で出た」という。そんな中、様々な方面から野球用具等の物資支援が相次いだ。6月には延期されていた県内最大規模の大会が開催されCスポ少も出場した。2回戦で敗退したが、3.11から3ヵ月程で大会出場も実現した。

夏休みが終わると、平日にも指導スタッフが都合をつけられるようになり活動が可能となった。こうしてCスポ少は復興へと向かったが、F氏は3.11から3年半あまりが過ぎてもCスポ少の復興は「実感的にはまだしていない」、復興度は「80パーセント」という。中学校の校庭には仮設住宅が建ち並び、野球を行うスペースが不足しているからである。「(中学校に)送り出しても思いっきり活動できる場所がない、けつはたいて行って来いという風なことが晴れていえる状況ではまだない」のである。「天災で起こったことは誰にぶつけることもできない、仕方がないということ」だが、100パーセントとなるのは仮設住宅が撤去され、卒団生に「思いっきり中学校で暴れてこいっていいようになった時」とF氏はいう。

2. Dスポ少について

(1) 被災までの様相

Dスポ少は、県内におけるサッカースポ少の草創期というべき1971年、地元有志によりB町の2つの小学校児童を対象に、児童のサッカー競技力向上と健全育成をねらいとして設立された。当初より入団制限を設けず、低学年は少なかったが全学年にメンバーがいた。設立翌年には早くも県大会で優勝し、全国大会出場を果たした。その後も各種大会で着々と好成績を残してきた。活動場所は、当初はO小学校の校庭(Cスポ少と同じ)であったが、1978年にB町の中心部に完成した町営第1スポーツ広場(以下「第1広場」)に移した。基本的には火曜と金曜等(以前は異なる)に練習、休日に試合ないし練習を行ってきた。Cスポ少と同様に、各活動には必ず指導スタッフが付くことにしている。

指導スタッフは総監督、監督、コーチ数名である。親の会も熱心に活動を支えている。総監督G氏は全国大会に出場した際、6年生で主力選手であった。高校でも強豪チームのレギュラーとして全国大会に出場した。卒業後は地元の社会人クラブでプレーを続ける中、Dスポ少の恩師の誘いから児童の指導にも携わるようになった。H氏はDスポ少におけるG氏の教え子であり、高校時代にG氏に誘われ指導スタッフに加わった。通常はH氏等が児童の指導に当たり、G氏が活動全体の指揮を執っている。

第1広場は長年に亘り、主にサッカーとソフトボールの活動場所とされていたが、近年はソフトボール活動が衰退し、ほとんどサッカー活動専用となっている。完成してから暫くは整備が行き届かず、使い勝手があまりよくなかったが、1980年代半ばに照明灯が設置された。さらに1990年代初頭には整地が進められ、水はけも改善された。その後はDスポ少にとって「最高の場所……自分達の家のように整備して綺麗にしてきた」とH氏がいのように貴重な活動場所となった。G氏も第1広場に対し「愛着がある」という。

(2) 被災の様相

3.11当時、メンバーは卒団した6年生を除き50人程であった。前述の通りG氏は津波で自宅ばかりか母をも失った。Dスポ少の活動を撮影した多くのビデオテープも流失した。H氏とメンバー数名は自宅が被害に遭い、H氏の場合は職場の被害も甚大であった。祖父を亡くしたメンバーもいた。G氏は家族と5月中旬まで親戚宅に避難し、その後みなし仮設に移った。業務の面では4月中旬まで避難所運営に当たり、役場等に寝泊りする日々を送った。H氏も家族と1ヵ月程母親の実家に避難した後、自宅の修繕が終わるまで1年程みなし仮設で過ごした。K氏とL氏は自宅を失った。兄のK氏は「これから家はどうなるのか」と不安に駆られ、L氏も当初は「サッカーどころじゃなかった」。彼らは1ヵ月程

避難所で過ごし、その後みなし仮設に移った。避難所は狭くてあまり運動ができず、特に「兄より活発でサッカーが好き」というL氏はサッカーをしたいとの思いが徐々に強くなった。避難所で「ボランティアがサッカー教室を開いてくれた時は楽しかった」という。

第1広場は仮設住宅用地となり、Dスポ少は活動場所を失った。H氏は、杭が打たれる第1広場の前を車で通る際、堪らず「打つな」と叫ぶこともあった。G氏は家庭と業務のことで精一杯であり、「正直なところ4月下旬頃までサッカーどころじゃなかった……サッカーという言葉自体あまり浮かんでこなかった」という。H氏も「この先どうなるんだろう……（Dスポ少は）活動できるのかな……辞める子どもが出てくるかなと思った」。G氏に対しては「お母さんが亡くなっていた」し「仕事の方も一杯いっぱい……避難所に泊まったりとかもしてたんで、身体的にもきついだろうな」と察し「サッカーどうしますっていうような電話はできない」という心境であり、「そのうち落ち着いたたら、Gの方から連絡くるかな」と考えていた。そんな中、県内出身のJリーガーがB町を訪問した際には、G氏から連絡を受け一緒に対応したという。

(3) 復興へ向けた様相

G氏は「学校再開までは（スポーツ等の）自粛ムードが町に漂っていた」という。G氏もサッカーどころではなかったものの、「このままクラブの火を消すことはできない……自分もここで育ててもらったし、いろんなことを学ぶことができた。伝統を絶やすことはできない」との思いが脳裏にあった。「公園で子どもがボールを蹴っているのをみることもあった。『子どもは明るかった』という。父兄から活動再開の要請があったわけではないが、『子どもに震災は関係ない、子どものためにもサッカーをやらせてあげたい』との思いが次第に湧いてきた。H氏も避難先で子どもが楽しそうに動き回っている姿をみ

て、G氏と同様に考えていたが、Dスポ少の活動は常にG氏が主導してきたため「再開はGの考え1つだと思っていた」という。

4月中旬には「学校が始まって、子どもの声が、（サッカーを）やりたい声が聞こえてきた」とG氏はいう。やがて「自粛ムードも弱まり」、やや落ち着きを取り戻したG氏は活動再開を決断した。しかし「場所を探しても、広い所は全部がれき置き場とかになっていた」。手頃な公園に目をやると、高齢者がグランドゴルフに興じていた。G氏は「平日は4月下旬だと暗くなるのが早いし、仮設住宅も完全にできあがってないので（町内では）やれる状況でない……やるならどっかに練習しに行ったりとか、合同練習したりとか。5年、6年くらいはやれないか」と再開の方途を考えた。「仕事が終わってから（車に）乗って行って、帰ってくる時間を考えると9時半か10時になってしまう」等と思いを巡らした末、「やらないよりやった方がいいだろう」との結論に達した。活動場所を探し続けた結果、近隣の民間フットサルコートを手配するに至った。平日の移動にはDスポ少がレンタルしていたバスを使い、乗車人数の関係でまずは上級生だけ再開することにした。引率は、大型の運転免許を持っており、早い時間に動けそうなH氏に頼んだ。この件を父兄に連絡すると皆が待ち望んでいたという。

5月の連休明けに活動を再開した。その後も数回、同じフットサルコートで活動した。また、交流のあった近隣のスポ少が活動する人工芝のグラウンドで合同練習の機会も得た。この際にL氏を含め移動可能な下級生も参加した。L氏は「震災で嫌だったことが薄らいだ……仲間とサッカーできて楽しかった」という。そこでは1ヵ月程、週1、2回のペースで活動した。いずれもH氏等が引率し、G氏は「行ける時は自分の車で追っかけた」。平日は「1時間半ぐらいフルにゲームをやって、終わると9時。着替えてバスで帰ってくると10時」であったが「子どもは活き活きしていた……子どもの方が切り替えが早かつ

た。そういうところから元気をもらった……清々しい表情っていうか、そういうのが伝わってくるし、汗かいて気持ちよさそうに帰っていくし。サッカーって楽しいんだな、子ども達は好きなんだなって感じた」とG氏はいう。

やがて、第1広場の隣にある町営野球場が使用可能となった。移動の問題はなくなったが狭かった。初夏には第2広場も使用可能となった。この段階で漸く参加できるようになったK氏は「久しぶりに皆と会えてよかった……楽しかった」というが、第2広場は広さこそ問題はなかったが凹凸が激しく、軟弱で水はけも悪かった。H氏は「練習にならなかった……子どもは集中できなかった」という。G氏は活動を充実させねばと手を尽くした。Dスポ少の関係者で整地に努め、仮設の照明灯も設置した。それでも決して第1広場のようにはならなかったが、さらに整備を進め活動を軌道に乗せることができた。そんな中、サッカー関係者等からDスポ少に対しサッカー用具等の物資支援が相次いだ。G氏、H氏にも義援金等が届けられた。各々が「励みになった」（G氏、H氏）という。

3.11から2年半あまり経つと、第1広場の近くに人工芝の町営フットサルコートが完成した。その後、第2広場しか使えない火曜以外は真新しいフットサルコートで活動することができた。「(その日は)子どものやる気が全然違った……でも復興度は(2015年3月の時点で)70パーセント……真の復興は第1広場に戻れた時」とH氏はいう。

IV. 考察

——各スポ少のレジリエンスとは——

両スポ少とも、前述の通り各指導スタッフの聞き取りを終えた時点で復興を遂げたとはいえないが、3.11から2ヵ月程で活動を再開し、その後は復興へと向かった。このプロセスで正しくレジリエンス(回復力)を可能な

限り発揮したとみられる。特に活動再開をめぐる対象者の言から、各スポ少のレジリエンスの要因(源泉)として指導スタッフの心情の面を容易に読み取ることができよう。

まず、Cスポ少が活動を再開するには、3.11以前と同様に指導スタッフの存在が不可欠であった。むろん活動場所を確保する必要もあったが、Cスポ少にとってみれば避難所となったO小学校の校庭は意のままにできるものではなかった。つまり、活動場所の確保(復旧)の面は基本的に、総合型地域スポーツクラブに関する先行研究¹²⁾でも指摘されている通り単一の地域スポーツクラブのレジリエンスの及ぶ範囲ではなく、いわば他力(行政等の力)に委ねるより他はない。

ここで着目すべきはやはり指導スタッフである。端的に言えば、Cスポ少におけるレジリエンスの担い手は、E氏もいうように監督F氏であったとみられる。F氏は業務で多忙を極める中でも「子どもは遊ぶのが仕事」「やらなきゃならないだろう」とCスポ少の活動再開について考えていた。そうした考えは、メンバーの親からの情報や、子どもを優先する町長の判断からも後押しされたのであるが、Cスポ少のレジリエンスの要因としてはまず、F氏の子どもへの思い、換言すれば子ども愛が挙げられる。また、F氏は「子どもを使って大人」が、生まれ育った「被災して沈んでる町」が「元気になることを願って」活動再開を決意したのである。つまり、F氏のB町への思い、いわば地域愛も要因とみるべきである。

もとより3.11の被害状況の改善のために、加藤¹³⁾は「子どものため」といった大人の価値基準が、また金菱¹⁴⁾は子どもの元気を利用し被災地(大人)を元気づけるといった発想が有効であることを示している。先行研究¹⁵⁾でも総合型地域スポーツクラブのレジリエンスの要因として、主軸を担う指導スタッフの子ども愛及び地域愛が挙げられており、Cスポ少に関する知見はこれらを支持するものといえる。

他方で、Dスポ少の活動再開の鍵を握るのも指導スタッフであった。Dスポ少の場合は、総監督G氏がレジリエンスの担い手であったことがH氏の言からも明白である。では、G氏を活動再開へとおし進めたのは何であったか。それはまず、「自分もここで育ててもらったし、いろんなことを学ぶことができた。伝統を絶やすことはできない」という自らの「クラブ」(Dスポ少)への思い、いわばクラブ愛とみられる。またG氏は、自ら甚大な被害に遭い業務の面でも多忙であったにも拘わらず、クラブ愛とともに「子どもに震災は関係ない、子どものためにもサッカーをやらせてあげたい」との思いも抱いていた。そうしたG氏の子ども愛も活動再開の決め手となったに違いない。このように、Dスポ少のレジリエンスの要因として、G氏のクラブ愛及び子ども愛が挙げられる。このうちクラブ愛については新たな知見である。

しかしながら、Dスポ少の場合、3.11から2年半あまり経っても活動場所の問題は解決されていない。かけがえのない「自分達の家」のごとき第1広場が復旧するまではいわば仮住まいの状態が続く。こうした活動場所の復旧の面は基本的に、単一の地域スポーツクラブのレジリエンスの限界と捉えるより他はない。この点は、Cスポ少の復興をめぐってF氏が気にする中学校の校庭についても然りである。むろん仮設住宅の問題はF氏がいう通り「仕方ない」のであるが、両スポ少が復興を遂げるには上記の活動場所の復旧が必要とみられる。

V. おわりに

以上、3.11被災地における各スポ少のレジリエンス(回復力)の要因についてみてきた。何よりも主軸を担う指導スタッフが抱いた子ども愛に加え、地域愛ないしクラブ愛といった活動再開ばかりかその後の活動をもおし進める類の心情が各スポ少のレジリエンスの要

因と捉えられる。子ども愛は大人の価値基準として普遍的なものとみられるが、F氏の地域愛及びG氏のクラブ愛の出自は、各々の言から遙かな過去の経験に遡及されることが窺われる。今後は、そうしたより深いレベルで要因を捉えるために、もとより3.11以前も分析の射程に入れる必要がある。また、他のスポ少、成人の地域スポーツクラブ、さらに各クラブのメンバー個々へと対象を拡大し、3.11被災地における地域スポーツ界のレジリエンスについて検証を重ねていくことが求められる。延いては、3.11以外の大災害被災地に対象を広げ検討していくことも有意義といえよう。

付記：本研究はJSPS科学研究費26350797の助成を受けたものである。

【文献】

- 1) 日本スポーツ産業学会, 2012, 『スポーツ産業学研究』22(1).
- 2) スポーツ審議会, 2017, 「第2期スポーツ基本計画について(答申)」, http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afield-file/2017/03/01/1382789_003_1.pdf, (参照日2017年9月6日)
- 3) 齋藤和貴・岡安孝弘, 2009, 「最近のレジリエンス研究の動向と課題」, 『明治大学心理社会学研究』4, pp.72-84.
- 4) 今村律子・山本勝昭・出水 忠・徳島 了・谷川知士・乾 真寛, 2013, 「大学生アスリートのレジリエンス傾向——S-Hレジリエンス尺度からみたレジリエンス能力の検討——」, 『福岡大学スポーツ科学研究』43(1・2), pp.57-69.
- 5) 葛西真記子・澁江裕子・宮本友弘・松田保, 2010, 「スポーツ活動経験とレジリエンスの関連——時間的展望, 身体的自己知覚の視点から——」, 『教育実践学論集』11, pp.39-50.

- 6) 小林洋平・西田 保, 2009, 「スポーツにおけるレジリエンス研究の展望」, 『総合保健体育科学』 32 (1), pp.11-19.
- 7) 吉田 毅, 2016, 「東日本大震災で被災した総合型地域スポーツクラブのレジリエンスに関する社会学的研究——地域スポーツ論への一視角——」, 『体育の科学』 66 (7), pp.535-540.
- 8) 吉田 毅, 2012, 「東日本大震災で被災したスポーツ集団の復興プロセス——被災の様相と復興への力——」, 『スポーツ社会学研究』 20 (1), pp.5-19.
- 9) 菅 美幸, 2008, 「総合型地域スポーツクラブの持続的発展に向けた育成支援に関する研究——新潟県の事例から——」, 『現代社会文化研究』 43, pp.143-160.
- 10) 田島良輝・谷島範恭・神野賢治・西村貴之・佐川哲也・奥田睦子, 2013, 「自立・持続経営を担保する総合型地域スポーツクラブのベンチマーキングに関する研究——財務指標から総合型地域スポーツクラブの持続性要因を探る——」, 『SSF スポーツ政策研究』 2 (1), pp.106-115.
- 11) 前掲書 7), p.537.
- 12) 前掲書 7), p.539.
- 13) 加藤真義, 2013, 「不透明な未来への不確実な対応の持続と増幅——「東日本大震災」後の福島の実例——」, 田中重好・正村俊之・船橋晴俊編, 『東日本大震災と社会学』, ミネルヴァ書房, pp.259-274.
- 14) 金菱 清, 2014, 『震災メメントモリ——第二の津波に抗して——』, 新曜社, p.102.
- 15) 前掲書 7), p.539.